

河口湖

伊藤左千夫

青空文庫

段ばしごがギチギチ音がする。まもなくふすまがあく。茶盆をふすまの片辺へおいて、すこぶるていねいにおじぎをした女は宿の娘らしい。霜枯れのしずかなこのごろ、空もしぐれもようで湖水の水はいよいよおちついて見える。しばらく客というものものなかつたような宿のさびしき。

娘は茶をついで予にすすめる。年は二十ばかりと見えた。紅蓮の花びらをとかして彩色したように顔が美しい。わりあい顔のはば広く、目の細いところ、土佐絵などによく見る古代女房の顔をほんものに見る心持ちがした。富士のふもと野の霜枯れをたずねてきて、さびしい宿屋に天平式美人を見る、おおいにゆかいであつた。

娘は、お中食のしたくいたしましうかといつたきり、あまり口数をきかない、予は食事してからちよつと鵜島へゆくから、舟をたのんでくれと命じた。

富士のすそ野を見るものはだれもおなじであろう、かならずみように隔世的夢幻の感到うたれる。この朝予は吉田の駅をでて、とちゅう畑のあいだ森のかげに絹織の梭の音を聞きつつ、やがて大噴火当時そのままの石の原にかかった。千年の風雨も化力をくわうることができず、むろん人間の手もいらず、一木一草もおいたたぬ、ゴツゴツたる石の原

を半里あまりあるいた。富士はほとんど雲におおわれて傾斜遠長きすそばかり見わたされる。目のさきからじきに山すそに連続した、三、四里もある草木あるいは石の原などをひと目に見わたすと、すべての光景がどうしてもまぼろしのごとく感ずる。

予はふかくこの夢幻の感じに酔うて、河口湖畔の舟津へいでた。舟津の家なみや人のゆききや、馬のゆくのも子どももの遊ぶのも、また湖水の深沈としずかなありさまや、ここごとく夢中の光景としか思えない。

家なみから北のすみがすこしく湖水へはりだした木立ちのなかに、古い寺と古い神社とが地つづきに立っている。木立ちはいまやかに黄葉しているが、落ち葉も庭をうずめている。右手な神社のまた右手の一角にまつ黒い大石が乱立して湖水へつきいで、そのうえにちよつとした宿屋がある。まえはわずかに人の通うばかりにせまい。そこに着物などほしかけて女がひとり洗濯をやっていた。これが予のいまおる宿である。そして予はいま上代的紅顔の美女に中食をすすめられつついる。予はさきに宿の娘といったが、このことばをふつうにいう宿屋の娘の軽薄な意味にとられてはこまる。

予の口がおもいせいか、娘はますますかたい。予はことばをおしだすようにして、夏になればいぶん東京あたりから人がきますか、夏は涼しいでしょう。鵜島には紅葉があり

ますか。鵜島まではなん里くらいありますなど話しかけてみたが、娘はただ、ハイハイというばかり、声を聞きながら形は見えないような心持ちだ。段ぼしごの下から、

「舟がきてるからお客さまに申しあげておくれ」

というのは、主人らしい人の声である。飯^{めし}がすむ。娘はさがる。

鵜島は、湖水の沖のちようどまんなかごろにある離れ小島との話で、なんだかひじょうに遠いところでもあるように思われる。いまからでかけてきようじゅうに帰ってこられるかしらなどと考える。外のようなすは霧がおりてぼんやりとしてきた。娘はふたたびあがつてきて、舟子^{かこ}が待つておりますでございますと例のとおりていねいに両手をついていう。「どうでしょう、雨になりはしますまいか、遠くへのりだしてから降られちゃ、たいへんですからな」

といえ、

「ハイ……雨になるようなことはなからうと申ししておりますが」

という。予は一種の力に引きおこされるような思いに二階をおりる。

宿をでる。五、六歩で左へおりる。でこぼこした石をつたつて二丈^{じょう}ばかりつき立っている、暗黒な大石の下をくぐるとすぐ舟があつた。舟子は、縞^{しま}もめんのカルサンをはいて、

大黒だいこくずきんをかぶったかわいい老爺ろうやである。

ちよつとずきんをはずし、にこにこ笑つて予におじぎをした。四方の山々にとつぷりと霧がかかつて、うさぎの毛のさきを動かすほどの風もない。重みのあるような、ねばりのあるような黒ずんだ水面に舟足ふなあしをえがいて、舟は広みへでた。キィーキィーと櫓ろの音がする。

ふりかえつてみると、いまだた予の宿の周囲がじつにおもしろい。黒石でつまれた高みの上に、りつぱな赤松あかまつが四、五本森をなして、黄葉した櫟くぬぎがほどよくそれにまじわっている。東側は神社と寺との木立ちにつづいて冬のはじめとはいえ、色づいた木の葉が散らずにあるので、いつそう景色がひきたつて見える。

「じいさん、ここから見ると舟津はじつにえい景色だね！」

「ヘイ、お富士山はあれ、あつこに秦皮とねりこの森があります。ちようどあつこらにめいます。ヘイ。こつから東の方角でございます。ヘイ。あの村木むらこだ立ちでございます。ヘイ、そのさきに寺がめいます、森の上からお堂の屋根がめいましょう。法華ほっけのお寺でございます。あつこはもう勝山かつやまでござります、ヘイ」

「じいさん、どうだろ雨にはなるまいか」

「ハイ晴れるとえいけしきでござります、残念じゃなあ、お富士山がちよつとでもめいるとえいが」

「じいさん、雨はだいじよぶだろうか」

「ハイハイ、耳がすこし遠いのでござります。ハイあの西山の上がすこし明るうござりますで、たいていだいじようぶでござりましょう。ハイ、わしこの辺^{へん}のことよう心得てますが、耳が遠うござりますので、じゅうぶんご案内ができないが残念でござります、ハイ」

「鵜島へは何里あるかい」

「ハイ、この海がはば一里、長さ三里でござります。そのちようどまんなかに島があります。舟津から一里あまりでござります」

人里を離れてキィーキィーの櫓^{ろせい}声^{こゑ}がひときわ耳にたつ。舟津の森もぼうつと霧につつまれてしまった。忠実な老爺は予の身ぶりに注意しているとみえ、予が口を動かすと、すぐに推測をたくましくして案内をいうのである。おかしくもあるがすこぶる可憐に思われた。予がうしろをさすと、

「ハイあの奥が河口でござります。つまらないところで、ハイ。晴れてればよう見えますがハイ」

舟のゆくはるかさき湖水の北側に二、三軒の家が見えてきた。霧がほとんど山のすそまでおりてきて、わずかにつつみのこした渚に、ほのかに人里があるのである。やがて霧がおおいかくしそうなようすだ。予は高い声で、

「あそこはなんという所かい」

「ヘイ、あつこはお石でござります。あれでもよつぽどな一村でござります。鵜島はあいまえになります、ヘイ。あれ、いま鳥がひとつ低う飛んでましよう。そんなさきにぽうつとした、あれが鵜でござります。まだ小一里でござりましよう」

いよいよ霧がふかくなってきた。舟津も木立ちも消えそうになってきた。キィーキィーの櫓声となめらかな水面に尾を引く舟足と、立つてる老爺と座しておる予とが、わずかに消しのこされている。

湖水の水は手にすくつてみると玉のごとく透明であるが、打見た色は黒い。浅いか深いかわからぬが深いには相違ない。平生見つけた水の色ではない、予はいよいよ現世を遠ざかりつつゆくような心持ちになった。

「じいさん、この湖水の水は黒いねー、どうもほかの水とちがうじゃないか」

「ヘイ、この海は澄んでも底がめいませんでござります。ヘイ、鯉も鮒もおります」

老爺はこの湖水についての案内がおおかたつきたので、しばらく無言にキイーキイーをやつとる。予もただ舟足の尾をかえりみ、水の色を注意して、頭を空くうに感かん興きようにふけている。老爺は突然先生とよんだ。かれはいかに予を観察して先生というのか、予は思わず微笑した。かれは、なおかわいらしき笑いを顔にたたえて話をはじめたのである。

「先生さまなどにやおかしゆうござりましようが、いま先生が水が黒いとおっしゃりますから、わし子どものときから聞いてることを、お笑いぐさもうに申しあげます」

かれはなおにこにこ笑つてゐる。

「そりや聞きたい、早く聞かしてくれ」

「へい、そりや大むかしのことだつたそうでござります。なんでもなん千年というむかし、甲斐かいと駿河するがの境さかいさ、大山おおやま荒れがはじまつたが、ごんごんごう暗くらやみの奥で鳴りだしたそうでござります。そうすると、そこら一面石の嵐でござりまして、大石小石の雨がやめどなく降つたそうでござります。五十日のあいだというもの夜とも昼ともあなたわかねいくらいで、もうこの世が泥海になるのだって、みんな死ぬ覚悟でいましたところ、五十日めごろから出鳴りでながしずかになると、夜のあけたように空が晴れたら、このお富士山ができていたというこつでござります」

爺さんはにこにこ笑いながら、予がなんというかと思つてか、予のほうを見ている。

「おもしろい、おもしろい、もつとさきを話して聞かせろ。爺さん、ほんとにおもしろいよ」

「それからあなた、十里四方もあつた甲斐の海が原になっていました。それで富士川もできました。それから富士山のまわりとところどころへ湖水がのこりました。お富士さまのあれで出口がふさがつたもんだから、むかしの甲斐の海の水がのこつたのでござります。この湖水はみんな、はいる水はあつてもでる口はないのでござります。だからこの水は大むかしからの水で甲斐の海のままに変わらない水でござります。先生さまにこんなうそつこばなしを申しあげてすみませんが……」

「どうして、ほんとにおもしろかつたよ。それがほんとの話だよ」

老爺はまじめにかえつて、

「もう鵜島がめえてきました。松が青くめいしましょう。ごろうじろ、弁^{べんてん}天さまのお屋根がすこしめいます。どうも霧が深うなつてめいりました」

高さ四、五丈^{じょう}も、周囲二町もあるうと見える瓠^{ひさひ}なりな小島の北岸へ舟をつけた。瓠の頭は東にむいている。そのでつばなに巨大な松が七、八本、あるいは立ち、あるいは這うて

いる。もちろん千年の色を誇っているのである。ほかはことごとく雑木ぞうきでいつせいに黄葉こうはくしているが、上のほう高いところに楓樹ふうじゆがあるらしい。木こずえの部分だけまっかに赤く見える。黄色い雲の一端に紅くれないをそそいだようである。

松はどうていこの世のものではない。万葉集まんようしゅうに玉松たままつという形容語があるが、真に

玉松である。幹の赤い色は、てらてら光るのである。ひとかかえもある珊瑚さんごを見るようだ。珊瑚の幹をならべ、珊瑚の枝をかわしている上に、緑青ろくしょうをべたべた塗りつけたようにぼつてりとした青葉をいただいている。老爺は予のために、楓樹にはいのぼつて上端じやうたんにある色よい枝を折ってくれた。手にとれば手を染めそうな色である。

湖みずうみも山もしつとりとしずかに日が暮れて、うす青い夕炊きの煙が横雲のようにただようている。舟津の磯いその黒い大石の下へ予の舟は帰りついた。老爺も紅葉の枝を持って予とともにあがつてくる。意いちゆう中の美人はねんごろに予を戸口にむかえて予の手のものを受けとる。見かけによらず如才じよさいない老爺は紅葉を娘の前へだし、これごろうじろ、この紅葉の美しさ、お客さまがぜひお嬢さんへのおみやげにとって、大首おおおつて折つたのぞなどいう。まだ一度も笑顔えがおを見せなかった美人も、いまは花のごときえみをたたえて紅葉をよろこんだ。晩食には湖水でとれた鯉の洗いを馳走してくれ、美人の唇もむろん昼ほどは固くなく、

予は愉快な夢を見たあのような思いで陶然^{とうぜん}として寝についた。

青空文庫情報

底本：「野菊の墓他六篇」新学社文庫、新学社

1968（昭和43）年6月15日発行

1982（昭和57）年6月1日重版

入力：大野晋

校正：小林繁雄

2006年7月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

河口湖

伊藤左千夫

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>